かみしなのにしかねじ 上品野西金地遺跡

所 在 地 瀬戸市上品野町

(北緯 35 度 10 分 50 秒 東経 136 度 54 分 01 秒)

調 査 理 由 道路改良工事国道 363 号

調 査 期 間 平成 18 年 10 月~平成 19 年 3 月

調 査 面 積 3400 ㎡

担 当 者 小澤一弘・早野浩二



調査地点(1/2.5万「瀬戸・猿投山」)

立地と環境

上品野西金地遺跡は、品野盆地の北東、水野川北岸の丘陵上から水野川に面した低地部分にかけて立地する。丘陵上の標高は約210m、低地部分の標高は約200mである。周辺の遺跡として、谷を隔てた西の丘陵上には桑下東窯跡と桑下城跡が、水野川の対岸、標高約300mの丘陵上には品野城跡が立地する。

調査の概要

今回の西金地遺跡の調査において、縄文時代、古代~中世、戦国~江戸時代の遺構・ 遺物を確認した。

縄文時代

縄文時代草創期の遺物として、丘陵南東斜面から連続する緩傾斜面の基盤層付近においてチャート製有舌尖頭器 1 点を確認した。付近においては、下呂石製凹基無茎石鏃 1 点も出土している。また、水野川に面した低地部分において、縄文時代に帰属すると推定される土坑数基も確認した。土坑は断面形状が袋状に近いものもある。土坑から出土する遺物はごく少なく、詳細な時期を特定するには及んでいない。

古代~中世

古代~中世の遺構としては、水野川に面した低地部分に展開する掘立柱建物群がある。建物 1、建物 2 は古代後期に帰属すると推定される。建物 1 は一部の柱穴に柱根が遺存する。建物 3、建物 4 は中世前期に帰属すると推定される。建物 3 は桁行 3 間の二面庇付建物で、柱穴から出土した遺物から、13 世紀に帰属すると判断される。建物 4 は桁行 3 間、梁間 2 間の側柱建物で、溝による区画が付随する。

戦国~江戸 時代

戦国~江戸時代の遺構は、主として丘陵とその周辺に展開する。丘陵は幾つかの谷状の地形によって分割され、それぞれの丘陵斜面には平坦面が造成されている。

480NR (007NR) とした谷状の地形には、谷の一定の埋没後に石積みが施され、石積みの周囲には大窯期前半を主とする遺物が大量に残されていた。石積みの周囲、谷を埋積する堆積層、谷の整地層中から出土した遺物には、天目茶碗などの碗類、丸皿などの皿類、擂鉢、釜などの通有の器種に加えて、茶壷、茶入、舟徳利、水差、燭台、仏餉具、魚形水滴、鳥(鶏・水鳥)形水滴、狛犬などのやや特殊な器種も多く含まれる。なお、茶壷の内部には骨片が遺存し、焼成後底部穿孔を施した個体も数個体確認した。匣鉢、挟み皿などの窯道具、焼成不良品の出土も多い。

丘陵東斜面から南東斜面においても、大窯期前半の遺物を大量に包含する堆積層が確認された。大窯の操業時に形成された灰層が部分的に残存している可能性も考えられたが、周辺に窯跡が存在した形跡は確認されていない。

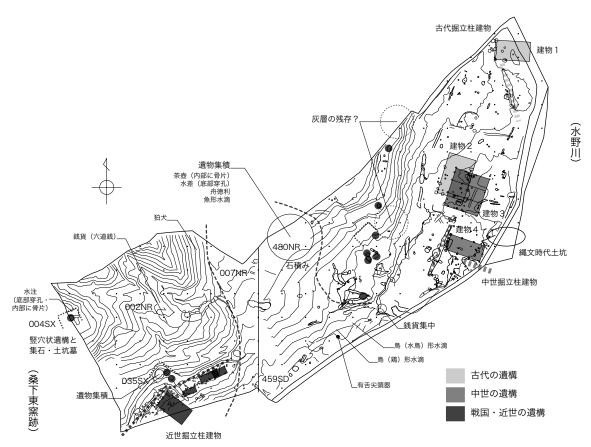
丘陵斜面と丘陵斜面を掘削して造成した平坦面には、集石遺構が点在し、002NR 南岸、丘陵南斜面の平坦面には数棟の掘立柱建物が分布する。集石遺構は、遺跡に西接する桑下東窯跡から連続して分布する遺構で、桑下東窯跡と同じく丘陵斜面を竪穴状に掘削した平坦面に集石を配するものが多い。背後に排水溝が付随するものもある。集石の

下位には土坑が検出されることから、集石と土坑は一体として墓を構成するものであったと考えられる。土坑内から遺物はほとんど出土していないが、002NR 南岸に配された竪穴状の遺構 004SX 付近には、焼成後底部穿孔を施した大窯期前半の水注が正位で据え置かれ、水注の内部には骨片が遺存していた。480NR 東岸に配された集積遺構群の近辺においては、大窯期前半の燭台などに混じって、80 枚以上の銭貨、煙管などの青銅製品、漆器椀が散在した状態で出土した。銭貨は全て渡来銭で、開元通宝、永楽通宝などの多様な銭種で構成される。丘陵南斜面を造成した平坦面において検出された掘立柱建物は、江戸時代に存続したものと推定される。周辺における同時期の遺物の出土も相対的に少なく、小規模な居住地を構成するものであったと考えられる。

まとめ

今回の調査で、上品野西金地遺跡は、縄文時代、古代~中世、戦国~江戸時代の複合遺跡であることが明らかになった。縄文時代の遺物は、品野盆地における同時期の遺跡の広範な展開を予測させるものである。古代~中世の遺構群は、低地に立地する集落を構成するもので、掘立柱建物が比較的大型である点も興味深い。戦国~近世の遺構・遺物は、質量とも遺跡の主体を構成するものである。特に大窯期前半については、出土遺物の内容から、遺跡付近に窯跡が存在したことに加えて、陶器の生産と流通に従事した集団が周辺に居住し、墓域を形成していた可能性も想起される。とするなら、関係する窯跡、集団の具体的な活動内容を明らかにすることが、今後の重要な検討課題となる。

(早野浩二)



遺構配置図 (S=1:800)

